

強い提督と強い艦娘たちの楽しい生涯

樽タル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間かどうか疑わしいレベルで強い提督と、その提督に毒されて独自の戦闘スタイルを確立した艦娘の楽しい楽しい生涯のお話。

駄文、安定しない書き方、昔の娘しか知らないから最近の艦娘は話に出てこないどころか触れすらもしないことがある、艦娘魔改造、ご都合主義のオリ設定、これらの注意点を踏まえた上でお読みください。

追伸

R-18展開はしばらく書けなそうにないのでタグからはずしました。

目次

プロローグ	1
1話 意味と価値	4
2話 吹雪の寮	7
3話 適性検査	10
4話 とある駆逐艦2名の訓練模様	14
5話 とある軽巡洋艦3名の訓練模様	17
6話 とある重巡洋艦2名の訓練模様	21
7話 鎮守府が誇る矛と盾	25

プロローグ

くプロローグく

それはいつ頃からだったか。

海からは自由が消えてしまった。

突如として現れた異形の化物、深海棲艦。

そしてそれらと戦う人とも艦とも言えぬ存在、艦娘。

艦娘は素質のあるものを提督として認め、付き従った。

この話は日本と言う国のある提督とその提督に従う艦娘の記録である。

く電車内く

私は出来損ないだ。

前の鎮守府で建造された私は、建造されてすぐに異動となった。

私は……稀に建造される“欠陥品”らしい。

その内容はさまざまだが、私は駆逐艦でありながら速力が低く、雷撃能力を持っていなかった。

装備がどうかではなく、そもそも雷撃できないのだ。

駆逐艦でありながらその長所の大部分を失い、練度の低い私に最早価値はなかった。

だから前の鎮守府の司令官は私を見限り、解体しようとした。

しかし司令官の秘書官の艦娘がそれを止め、私の異動を申し出てくれた。

秘書官いわく、“艦娘達の最後の砦”

司令官いわく、“欠陥品の廃棄場所”

守るために生まれながら守る力を持たない私にとって、どちらが本当でも関係なかった。

ただ、無駄で無意味で無価値なこの命を終わらせてくれるのなら。

電車から降りると移動先の鎮守府から迎えの人が来ていた。

彼女は大淀さんと言い、どの司令官にも最初からついている所謂任務娘だという。

大淀さんは私にいろいろ話してくれた。

そのほとんどが私の耳には、心には届かなかった。

でも、少しだけ耳に残ったことがある。

移動先の鎮守府にいる艦娘は全て“欠陥品”だということ。

私と同じで欠陥品の子たち。

その子たちとなら、少しはわかり会えるかな？

鎮守府に着いた私は、まず最初に執務室に通されて司令官に挨拶するものだと思っていたが、大淀さんは私を連れて海の方、砲撃音が生きているからおそらく演習中であろう場所に向かいだした。

「あ、あの…大淀さん？」

私はつい大淀さんに声をかけるが、大淀さんは見せたいものがあると言って私の手をグイグイと引いていく。

諦めておとなしくついていった私が目にした光景はとても信じがたいものだった。

演習をするのは珍しくない。

しかし、その内容が異常だった。

長い刀を鋭く振るう者と剣と盾でそれを捌く者。

大きな槌を豪快に振る者と大きな剣を背負い飛び上がってそれを回避する者。

長大な単装砲のようなものを扱って砲撃する者と、身の丈を超える盾でそれを防ぐ者。

ここにいる子たちは皆欠陥品だと聞いていた。

だが、目の前の光景は普通の艦娘だと言われても納得できないような異常な光景だった。

「大淀さん…これは？」

思わずまた大淀さんに聞いた私に、大淀さんは笑顔で答えた。

大淀「ようこそ。欠陥品の楽園へ」

どうぞやら私はとんでもないところに異動してきたらしい。

1話 意味と価値

↳ 執務室前廊下

演習の様子を見て驚愕した私は大淀さんの話もろくに聞こえないまま、気がついたら執務室の前に立っていた。

大淀「緊張してるの？」

私の様子を見て、大淀さんが声をかけてくれる。

確かに、少し緊張している。

他所では役立たずの自分が、ここではどのような扱いになるのか。鉄砲玉のように帰ることのない存在か、それとも兵器のようにただ使役されるだけの扱いか、はたまた少女としての面だけを見て行為を強要されたりするのか、考えが浮かんでは沈んでいく。

大淀「大丈夫ですよ。あの人は優しいですから。さあ、どうぞ。私はここまでです」

そう言って大淀さんは去っていった。

2回深呼吸をし、扉を4回ノックする。

「入っていいぞ」

中からそう声が聞こえたので意を決して扉を開いて中に入る。

執務室の窓際には司令官と思われる男性がこちらに背を向けて立っていて、外で行われてる演習を眺めていた。

「このたび〇〇鎮守府より異動してきました。欠陥駆逐艦吹雪です」

この挨拶は好きじゃない。まだ2回目だけど自分を欠陥品と呼ばなければいけないのは、事実でもやっぱり心地の良いものじゃない。

私の挨拶で司令官がこちらに向き直る。

司令官は若い男性で身長は大体平均くらい。

でも制服の上からでもわかるぐらいに筋肉が発達していて、とても指揮官といった体系じゃない。

そして、なぜか若さに似合わない異様な威圧感を放っている。

正直、怖い。

「そうか。吹雪、お前の欠陥はどこだ？」

全て書類で伝わっていい内容ではあるが、おそらく書類と誤りがない

かを確認しているのだろう。

吹雪「はい。私は速度が低く、雷撃能力がありません」
「なるほど。じゃあ次だ。お前は何のためにここに来た？」

吹雪「はい。私は海を守り、人類を守るためにここに」

「建前は聞いてちやいないな」

私が言い切る前に、司令官にそう言って遮られた。

建前は聞いてない…か。

どうやらお見通しらしい。

確かにそれは建前だ。

自分が艦娘としてあるための。

正直に言うなら、私が言うことは決まっている。

吹雪「私は…自分に意味が欲しいんです、価値が欲しいんです。生まれながらに欠陥品の烙印を押され、廃棄されるだけの存在の自分に。意味がないのに耐えられません。価値がないのに耐えられません。だから私は…！」

つい思いが口からでてしまい息を詰まらせる私に司令官はまた質問する。

「なら、お前は自分にどんな意味が欲しい？どんな価値が欲しい？」

吹雪「私が私でいられる意味が欲しいです！代わりのいない価値が欲しいんです！」

つい興奮し、少しずつ声が大きくなるのが自分でわかる。

でも、この声は止まらない。心が止めてくれない。

吹雪「役立たずでも認められたい！欠陥品の烙印を消せるだけの意味が欲しい！！私がわたしであるために…！！艦娘であるために！！」

ひとしきり叫んで冷静になって謝ろうとするが、司令官が先に喋り出す。

「それだけ聞ければ十分だ。まずはお前にここの一員という意味と、価値をやる。」

司令官はそう言う私に何かを渡してきた。

それは2.5メートルほどの鉄の棒の様なもので、棒の半分くらいまで布の様な物が巻き付いている。

吹雪 「司令官…これは？」

「お前の所属する隊の旗だ。これからはその旗に従って生きる」

吹雪 「広げても？」

司令官が頷いたのを確認して、私は旗を広げる。

そこに描かれていたのは地球と、大きな翼で地球を守るように包み込む美しい天使だった。

「それと同じ旗を掲げてる寮が、これからのお前の家だ。あとで寮員に挨拶でもしてくるといい」

吹雪 「あの…この旗にはどんな思想があるんですか？」

「それは俺より寮長に聞くといい。その旗を作り、掲げた張本人だ。それと、明日は工廠でお前の適性検査をする。影響が出るとお前の今後に関わるから十分な睡眠をとれよ」

吹雪 「はい！失礼します！」

私はここへ来たときと比べ、随分と心が変わっていた。

なぜだか欠陥品の自分でも、ここでなら意味と価値が見つつけられると確信していた。

私は少し元気を取り戻し、自分の家となる寮へと向かっていった。

2話 吹雪の寮

く 鎮守府中庭く

この鎮守府は正門から入って最初に本館があり、その後ろに中庭、中庭を囲むように6棟の寮が建っている。

吹雪の寮は一番左に建っていた。

吹雪が寮の入り口の上を見ると看板がかかっており、

〔Wings to patron〕

と書かれていた。

吹雪「この旗の意味…なのかな？」

吹雪はそう呟くと中に入っていた。

く 艦娘寮内く

吹雪「うわ…：凄いなあ」

寮の中に入るとまずロビーがあった。

ロビーの中は掃除が行き届いていて綺麗で、嫌みにならない程度にきらびやかな装飾があしらわれていた。

ロビーには2階へ続く階段があり、おそらくその先に各々の部屋があるのだろうの思い、吹雪は階段をあがっていった。

2階に上がると左右に部屋のドアがいくつかある廊下と、3階へ続く階段と別れていた。

ドアにはプレートで入居者と思われる者の名前が書かれている。

吹雪はとりあえず一番近くにあったドアをノックしようと近づいた。

ドアには初霜、若葉と書かれていたが、ドアノブに“外出中”と書いた可愛らしい小さな看板がかけられていた。

次にその後ろにあるドアを見るとそこには扶桑、山城と書かれていた。

吹雪はそちらのドアをノックすると、和服を着た幸薄そうな黒い長髪の綺麗な女性が出てきた。

「あら？見ない子ね。新しく着任したの？」

吹雪「はい。欠陥駆逐艦吹雪です。これからこの寮の一員としてお世話になります」

吹雪は敬礼をしながらそう言う。

「そう。よろしくね吹雪ちゃん。私は欠陥戦艦の扶桑よ。この寮の寮長を任されてるの」

吹雪「そんなんですか！それじゃあ、この寮旗の意味を教えてくださいませんか？気になってて」

扶桑「いいわよ。この寮の正面玄関にの看板の文字は読んだかしら？」

吹雪「はい見ました。あの英語のことですよね？」

扶桑「ええそうよ。そのこと。あれは“守護する翼”という意味だね。この旗は例え何もなくても世界を護る天使のように、大きな翼で全てを護って見せるとい意志の表れなの。だから、この寮にはこの鎮守府の中でも特に護りたいという意志の強い艦娘が集まるの」

吹雪「そうだったんですか。ありがとうございます！」

扶桑「フフフ：いいのよ。それじゃあ、今から空き部屋に案内してもいいかしら？」

吹雪「はい！大丈夫です」

扶桑「そう。じゃあついてきてね」

↳ 艦娘寮内空き部屋↳

扶桑「今日からここが貴女の部屋よ。もし何かわからないことがあつたら私は部屋にいるから聞きにきてね」

吹雪「はい！ありがとうございます」

扶桑はそういうと去っていった。

吹雪の寮室は一人で使うには広く、元々数人で使うように作られた寮室であろうことを理解できる。

吹雪「少し寂しい感じもするけど…綺麗だし、お布団フカフカだし、とりあえず過ごせそう…かな？」

吹雪（いろいろ不安はあるけど…扶桑さんもいい人で頼りになりそ

うだったし、きっと大丈夫だよね)

吹雪「さて、荷ほどきしなきゃね！」

吹雪は自分の荷物を整理し、明日にそなえて早々に眠りについた。

3話 適性検査

く工場く

翌日、検査を受けることになっていた吹雪は工場を訪れた。
昨日大淀に案内されているはずだが、その前に見た演習の様子が衝撃的でよく覚えていない。

だからであろう。

覗いた瞬間に唾然としたのは。

吹雪「ここ…工場…だよな？」

大小様々な剣や槌や火炮に、鉄でできた翼のようなものや、少し形状の違う艤装。

見たことのない艤装（？）が盛り沢山あった。

そしてそれを整備するのは、サイズは普通でもビックリするほどムツキムキな妖精たち。

そしてそれらを指揮するピンクの髪の長い女性。

吹雪「私、道間違えてないよね？」

「ああ。工場はここであってる」

吹雪「あ、司令官」

「今明石を呼んでくる。少し待ってろ」

吹雪「あ、はい」

司令官がそういつてピンクの髪の女性の所へ行って話をしだした。
少しすると女性と司令官が一緒にこちらに向かってきた。

「貴女が今日検査を受ける吹雪ちゃんね。私、明石つて言います。よろしくね」

吹雪「えと、昨日着任した吹雪です。今日はよろしくお願いします」

「明石、早速で悪いが検査を頼んだ。俺は訓練場の方に向かってくる」

明石「まっかせてください！バッチリ検査しちゃいますよー」

明石「さてと、それじゃあ吹雪ちゃん検査を始めるから奥に来てくれる？あ！検査って言ってもそんなに難しく考えないで気楽にね」

吹雪「はい！」

奥に案内されている間も吹雪は周りを見てみるが、ものの見事に

知ってる装備がなかった。

吹雪（この人たちって何を使って戦ってるんだらう？）

そう考えていると明石がとあるドアを開けて中に入るよう促したので吹雪は中に入っていく。

そこには椅子が幾つかと、カプセルのような物がついたやたらと大きい機械が置いてあった。

明石「その椅子に座って。まずは幾つか質問させて貰うけど、あんまり考え込まないで答えてね。まずひとつ、ここの鎮守府の演習はもう見た？」

吹雪「はい。見ました」

明石「なら、それを見てどう思った？」

吹雪「単純に凄いなあと思ったのと、失礼だと思うんですけど…その、本当に欠陥品なのかなって思っちゃいました」

明石「なるほど。それじゃあ次ね。吹雪ちゃんはどんな戦い方をしたい？例えば、砲雷撃戦とか白兵戦とか、長距離を保った狙撃とかね」
吹雪「私は守れる戦いをしたいです。それが場所でも、物でも、人でも、何かを守る戦い方をしたいんです」

明石「ふむふむ。具体的に守る方法は考えていたりする？例えば守る物が貨物船だったとして、相手を早く倒すことで間接的に守るのか、それとも貨物船そのものを守るのかとか」

吹雪「そういうのは考えてなかったです。自分が何かを守れることなんて、この先ずっとこないと思っていたので」

明石「なら、それはこれからね。それじゃあ、次はこの機械に入ってくれる？見た目はちよつとゴツいけど、スキャンするだけで危ないものじゃないから」

吹雪「は、はい（これに入るの!?)」

吹雪が恐る恐る機械のカプセルのような物に入るといかにもな感じのウイーンという音が鳴り出し、カプセルのドアが閉まる。

吹雪（これ、本当に大丈夫かな…）

吹雪は不安に思うも、既に入ってしまったのでどうしようもない。

しばらくしてドアが開いたとき、そこには満足げな表情を浮かべる明石がいた。

明石「お疲れ様吹雪ちゃん。それで検査の結果だけど、吹雪ちゃんなら結構幅広い改装が出来るみたいね」

吹雪「幅広い改装？それって改二みたいな感じですか？」

明石「いいえ、ここの鎮守府の改装は他所の鎮守府の改装と大分変わってるから改二とは違うかな？」

吹雪「それは…欠陥品だから、ですか？」

明石「あ！誤解しないでね、欠陥品だからっていうよりは欠陥品だからこそその改装なの」

吹雪「欠陥品だからこそ…？」

明石「うん。吹雪ちゃんはその艦娘達が、普通に考えたらおかしな行動をしている演習で見たでしょう？あれは全部艦装に特殊な改装を施してるからなの」

吹雪「え？じゃああの跳び跳ねたり大きな武器を持っていたりするのは全部…」

明石「そう。欠陥品だからこそその改装って訳」

吹雪「それって危ないんじゃないですか？あそこまで大きな改装って艦娘の存在そのものが揺らいじゃうんじゃない？」

明石「普通の艦娘ならね。でも、欠陥品の艦娘だとそれが出来るようになるの」

吹雪「それはどうしてですか？」

明石「う〜ん、少し難しい話になるんだけどね。元々、艦娘の改装っていうのは艦娘の練度が上がることで、そうね…器って言ったら分かりやすいかな？それが大きくなっていくの。それで、その大きくなった器の空いた分を埋めるように、艦娘のデータにそって改装を行うの。ここまでは大丈夫？」

吹雪「はい。大丈夫です」

明石「じゃあ続けるね。今話したのが普通の艦娘の改装。それで欠陥品の場合は能力がなくなってる分だけ、つまり欠陥の分が大きく空くことになるの。吹雪ちゃんの場合で言うなら、速力が遅くて雷撃が

出来ない分、器に空きが出来るの。この鎮守府ではそこを上手く利用して改装するの」

吹雪「器に空きができるのはわかりましたけど、どうしてそれであるまで違う改装が出来るんですか？艦娘は自分の艦の改装しか出来ないはずですよ？」

明石「それも空きが関係してるの。どうしても悪い意味に聞こえるからあんまりこの言い方はしたくないんだけど、欠陥品の艦娘は艦娘としてとても不安定な存在なの。だから本来ありえない改装をしたり、艦とは関係ない特殊な艦装を装備しても、元が不安定な存在だから関係ない装備を艦娘の艦装として誤認証できるの。言い方は悪いけどね。だから問題なくそれを艦装として扱えるってこと」

吹雪「うくん。わかったような、わからないような」

明石「まあ、これははつきりしないアバウトなところだからね。欠陥品だけが特殊な装備ができるってわかってれば問題ないわ」

吹雪「はい。わかりました」

明石「検査はこれでおしまい。お疲れ様。次は吹雪ちゃんの艦装だけど、吹雪ちゃんはどういう装備がいい？」

吹雪「うくん。あまりはつきりと浮かんでこないです」

明石「そつか、それなら他の子達の演習や訓練を見てみると良いかもね。ここは個人から複数まで色んな演習をやってるから、演習場か訓練場に行けば誰かいると思うから。それを見学したら、何かアイデアがでるかもね」

吹雪「はい。なるべく早く決めます」

明石「あはは！あんまり焦らなくてもいいよ。ここでは皆そうやって自分の戦い方を決めてきたから。吹雪ちゃんのペースでゆっくりね」

吹雪「はい。ありがとうございます！」

検査を終えた吹雪は早速演習場に向かっていった。

そこで目にするものは自分にどんな影響を与えるのか、吹雪はそれが楽しみで仕方がなかった。

4話 とある駆逐艦2名の訓練模様

く第一訓練所く

明石のアドバイスを受けた吹雪は、早速工廠から最も近くにあった第一訓練所へ向かっていった。

何度か道を間違えたものの、無事に第一訓練所へたどり着いた。

そこでは体格から予測するに駆逐艦であろう二人が対人で訓練に励んでいた。

吹雪「同じ服装……同型艦なのかな？」

片方は黒髪の子で、もう片方は金髪の子。

二人とも足に妙な形の艀装をつけていて、駆逐艦にしてもおかしい速度で動いている。

そもそも艦娘って急発進と急停止は出来ない筈なのに……？

さつき明石さんが言ってた改装の結果なのかな？

その二人は素人の私が見ても激しい攻防を繰り返している。

黒髪の子は両手で長めの刀を握っていて、背中には変わった形の艀装の様な物がついていて、そこに先の尖った警棒のような物が2本ついている。

あれも武器……かな？

金髪の子は右手に厚みのある長剣を持っていて、左手には先の大きな短い銛のような物が装着されてる妙な艀装をつけている。

見ていると金髪の子が振り下ろした剣の衝撃で黒髪の子が後退り、その隙に金髪の子が左手の艀装を黒髪の子に照準する。

とても届きそうにない距離だけどうして？

「決まりっばいー」

その言葉と共に銛が黒髪の子に向かって“射出”された。

吹雪「えっ!?(あれって飛び道具だったの!?)」

私が驚いていると黒髪の子は刀を横に構えて防御するが、刀が弾かれて手を離れる。

弾かれた両手を背中に持っていく、即座に棒のような物を構えようとするが、その前に金髪の子の剣が黒髪の子の首筋にあてがわれる。

「私の勝ちっぽい！」

「うん。今回は僕の負けだね」

「どうやら決着が着いたみたい。

「ん？貴女はだあれ？」

金髪の子が私に気付き、話しかけてきた。

吹雪「あ、私は昨日からこちらの鎮守府に着任しました。吹雪です」

「私は夕立！よろしくっぽい！」

「僕は時雨だよ。よろしく」

金髪の子は夕立、黒髪の子は時雨というらしい。

時雨「僕たちには敬語は使わなくていいよ。同じ駆逐艦だしね。着任したばかりなら、自分の戦い方を見つげるための見学ってところかな？」

吹雪「そ、それじゃあやめるね。うん見学してたの。まだ自分の戦い方がはつきりしなくて…」

夕立「最初はみんな同じだから気にする必要はないっぽい！」

吹雪「あのか。良かったらその艦装？のこと聞いてもいい？」

夕立「私は大丈夫っぽい！時雨は？」

時雨「僕も大丈夫だよ。どっちから聞きたい？」

吹雪「じゃあ、夕立ちちゃんからお願ひ」

夕立「うん！まず、右手の剣は強度と鋭さを両立した造りで、明石さんはアロンドイトって呼んでるっぽい。両手と片手どちらでも使えるように長さや重さを調整してるっぽい。左手のこれはスピアアンカーって名前で、射出出来るスピアをワイヤーで繋いであって、刺した相手を引き寄せたり自分から近づくのが基本的な使い方っぽい。使わないときとか剣を両手で持つときは背中の武装ラックに装着しておくっぽい！」

時雨「次は僕だね。僕の刀は強度より切れ味を優先させてあってね、名前は水切って言うんだ。背中の武装ラックに装着されてるのはパイルメイスって言ってね、刀じゃ効果の薄くなる装甲の厚い相手とかに、警棒みたいな扱い方でダメージを与えるんだ。それでも効果の薄い場合は刀を背中にしまってパイルメイスを一本だけもって両手

ですっかりと支えて、突き刺すように使うんだ。これの先端は小型パイルバンカー…杭打ち機になってるから戦艦の装甲にも効果的にダメージを与えられるんだ。少し衝撃が強いのがネックだけどね」

吹雪「な、なるほど…（普通に説明してるけど凄く怖いこと言ってる！）」

時雨「うん。それじゃあ訓練に戻るね。早く見つかるといいね」

夕立「じゃあね！」

吹雪「う、うん。またね…」

訓練に戻る二人を吹雪は呆然と眺めていた。

吹雪「あ、あの二人が特殊なだけかもしれないし…次のところいこう！うん。そうしよう！」

自分に言い聞かせるように吹雪はそう言いながら次の訓練場へと向かった。

5話 とある軽巡洋艦3名の訓練模様

く第二訓練場く

第二訓練場に着いた吹雪は遠くで口論している3人の艦娘を見つけた。

3人は同じ制服を着ていて、姉妹艦であることが遠目でもわかった。

吹雪「何を言い争ってるんだろう？」

近付くにつれて徐々に声が聞き取れるようになってきた。

艦娘1「……から……ぱり………なきや！」

艦娘2「……さん……戦ばかり………ですか！」

艦娘3「それ………ちゃん……かへった………」

3人もまた、前にあつた時雨と夕立同様に変わった装備をつけていた。

1人目の人は、足の艦装のふくらはぎ部分が少し大きくなってるし、腰にも不思議な形の艦装がついている。右手には黒い色の剣を持っていて、腰には同じく黒で短い鎌のような物がついている。正直、どう使うのか予想できないかな？

2人目の人は、足と腰にツインテールの人と似たような艦装をつけてるけど、何より持つてる刀が異常過ぎる。凄く長い。刀身だけで私の2倍近くあるよ……あんな長いのちゃんと振れるのかな？

3人目の人も、足と腰に他の二人と似たような形の艦装をつけてる。腰と太ももの所に拳銃……かな？がついてて、とても深海棲艦と戦える装備に見えないかな。

吹雪が色々と考えているうちに声の届く所まで来たので、恐る恐る3人に声をかけると3人は口論をやめ、こちらを向いた。

艦娘1「あれ、新しい子？」

吹雪「は、はい。欠陥駆逐艦の吹雪です」

艦娘2「あ、見苦しい所見せちゃいましたね」

吹雪「いえ、そんなことないです！見てて仲がいいんだなって思っていました」

艦娘2「そう。ならよかったです」

艦娘3「吹雪ちゃんは、何でここに来たの？見学？」

吹雪「そうです。まだ二つ目ですけど…」

艦娘1「そっか。来たばかりだからまだ戦い方がはっきりしてないんだね。あ、そうそう。私は川内。よろしくね！」

艦娘2「神通です。よろしくお願いしますね」

艦娘3「那珂ちゃんだよ！よろしく！」

吹雪「はい！よろしくお願いします！それでその…よろしければ皆さんの戦い方を教えてくださいませんか？」

川内「うん。いいよ！私の戦法は、基本的に昼間は足の艀装と腰につけてるスラスターで高速移動しながら、この片刃剣…ナイトクイーソって名前なんだけど、この剣で速度のまま連続して切り抜けるって感じかな？それで夜戦のときは剣を背中にマウントして、敵に静かに忍び寄ってこの鎌、ナイトサーバントで一瞬のうちに首を切り落とすんだ。簡単でしょ？」

神通「それが出来るのは姉さんだけです？私の艀装は姉さんと似ていて、姉さんほど最高速度は速くはないですが、すぐに最高速度まで速度をあげられて、その速度で急接近してからこの長い刀。空断（からだち）で一刀両断し、即座に離脱してまた急接近して、って戦法をとってます。勿論仲間を間違って切ってしまわないように訓練してますよ？」

那珂「次是那珂ちゃんだね！那珂ちゃんは腰と太ももに、二挺ずつついでる銃を使って戦うんだけどお、腰についでるのが弾数は少ないけど威力の高い銃、太ももについでるが弾数が多くて威力の低い銃なんだ。腰についでるのがブルーティアーズ、太ももについでるがレッドレインって言うんだあ。ブルーティアーズは戦艦の主砲と同じ位の威力があるから、敵の弱点とか頭に当てるのが基本的な使い方、レッドレインが軽巡の主砲よりちよつと威力が高い位だから、敵を牽制しながら隙を作る物かな？でもお、那珂ちゃん凄いやからあブルーティアーズは滅多に使わないだよな」

川内「んー。口で言うのも難しいから、実際に使ってるのを見せてあ

げようか？」

神通「いいですね。それじゃあいつものルールでやりますか。」

那珂「えー、那珂ちゃんもう疲れたんだけどな〜」

川内「じゃあ、少し離れててくれる？」

川内が吹雪にそう言うのと吹雪は少し離れていく。

それを見た3人は互いに距離を離す。

川内「じゃあいくよ！」

川内はコインを取りだしそれを3人の中心に投げた。

コインが落ちると同時に、3人は動き出した。

最初に動いたのは神通で、遠くにいる吹雪でも視認するのがやっとな速度で那珂に急接近する。

那珂「ええ！いきなり!？」

那珂はそう言いながら神通の一刀を身を反らして回避し、神通に向かってレッドレインの引き金を引く。

神通は即座に反応し、それを回避すると同時に距離をとる。

那珂から距離をとった神通に川内が右から左へ剣を振り抜く。神通はそれを刀で防御した。

防御された剣を速度に任せてそのまま振り抜き、さらに速度上げながら今度は那珂に向かって左からの切り払いをする川内。

那珂はそれを後ろへ飛び込むように転がって回避し、受け身をとって立ち上がると同時に神通に牽制の射撃を3発、川内に反撃の射撃を4発撃つ。

神通は刀の長さを意にも解していないような刀捌きで刀を振り回して弾を弾きながら那珂に急接近する。川内は飛び上がるようにして弾を回避した。

神通が再び那珂に斬りかかる。那珂は今度は避けず、左手のレッドレインで受け止め、即座に右手のレッドレインをしまつてブルーティーズを早打ちの要領で抜きながら撃つ。

それを回避してまた距離を離そうとした神通だが、川内が上から強襲してきた。

弾を避けるために飛び上がったときに神通の動きを予測して飛ん

でおり、二人に斬りかかる。

神通は腰のスラスタを巧みに使つて後ろへ高速移動し、那珂は後ろに転がるようにして避けてレッドレインを神通へ、ブルーティアーズを川内へ向けて構えた。

3人はそのまま動きを停止する。

川内「こんなところかな？」

川内が構えを解くと、神通と那珂も構えを解いた。

神通「どうでしたか？吹雪ちゃん？」

吹雪「え〜つと、その、何が何だか……？」

那珂「速く動き過ぎたんじゃない？吹雪ちゃん捉えきれないよ？」

川内「んー？これでも落としたんだけどなあ〜」

神通「まあ最初は仕方ないですね。まだ次の所へ？」

吹雪「あ、はい。次の所も見てみます」

那珂「うん！それじゃあ気を付けてね〜！」

吹雪「はい！失礼します！」

吹雪は3人に頭を下げて、第二訓練場を後にした。

吹雪「やつぱりあれがここでは普通なのかな？私……あんなにできるかな？」

やはり不安を抱えながら地図を開き、次の場所へと向かった。

6話 とある重巡洋艦2名の訓練模様

↳第三訓練場付近

吹雪「あれ？この辺の筈なのになあ……」

吹雪は第二訓練場から第三訓練場に行くのに軽く迷子になっていた。

地図を傾けたり逆さにしたりして何とか現在地を確認しようとするが、どうにもわからない。

吹雪が一人でうんうんと唸っていると、前から二人の艦娘が歩いてきた。

その二人もやはり前の5人と同じく、見慣れない装備をつけていた。

一人は背中、というよりは肩甲骨の辺りから棒のようなもので左右対称の大きな四角くて長い筒のようなものがついているし、腰には剣と銃がひとつになったような物がついている。足の艦装も大分違う。

もう一人も両方の肩甲骨の辺りに鉄のプレートがついている。

でも、形や厚さや大きさが遠目で見ても分かるくらい違う。何と云うか……変な形の盾みたいな感じ？

大きさは一人目の人のより少し小さい。形は十字架？のような形。あれも武器なのかな？

吹雪が考えていると二人が吹雪に気づいたらしく、吹雪のもとへ歩いてくる。

「入ってきた新しい子って貴女の事？私古鷹。よろしくね」

「あたしは加古ってんだ。よろしく！」

吹雪「私は吹雪って言います。よろしくお願いします」

加古「地図眺めて何してるの？」

吹雪「えつと、第三訓練場に行きたいんですけど、道に迷ったみたいで……」

古鷹「そうなの？今から私達そこに行って訓練を始めるんだけど、もし良かったら見学にしてみる？」

吹雪「本当ですか!?!ありがとうございます！」

加古「いいのいいの！どうせ行くところだしねえ」

3人はそう言って歩きだした。

加古「良かったらさ、行くまでの間私達のスタイルの話聞く？見学ってことはまだはつきりしてないんでしょ？」

吹雪「はい！お願いします！」

加古「じゃあ、あたしからね。あたしの武装は今背中についてる2つの十字鎚と両前腕の手甲だね。十字鎚は手甲につけて使うのが基本でさ、短い方が打撃出来るハンマー状になってて、長い方は刃がついてるから手甲剣として使えるんだ。それに範囲は狭いけど攻撃を防ぐ盾にも使えるんだ。手甲はかなり堅いからそれだけで徒手空拳を支える武器になるよ。戦い方は基本的に足のスラストで高速接近から長い方を使った切り抜け、もしくは短い方で殴りつけてそのまま高速で離脱するって感じ。チャンスがあれば相手の懐でインフライトって感じだよ。次古鷹ね〜」

古鷹「うん。私は腰についてる一対の銃剣で牽制して距離をとりながら、隙を見て背中サブアームについてる2門のスラストターキャノンでの砲撃が基本的な立ち回り方なの。相手に接近したときは両手の銃剣で切りつけて、足の艀装にある超硬質の三本爪での蹴り技を主体にした一撃を入れるっていうふうに戦うの。でも基本は援護が主な役割だよ」

吹雪「なるほど。あ、ここが第三訓練場ですか？」

古鷹「うんそうだよ。折角だから、見学していく？」

吹雪「はい！是非お願いします！」

古鷹「うん！それじゃあちよつと待ってね」

古鷹はそう言うのと加古と一緒に訓練場の中心に向かっていく。

二人が程度距離をとると古鷹はポケットから小さな葉莖を取りだし、上に放り投げた。

それは二人の間で決められている合図である。

古鷹は銃剣を両手に持ち構え、加古は十字鎚を手甲に取り付け構える。

そして……………

薬莢が地面に落ちると同時に二人は動き出した。

加古はスラスターを噴かして高速で古鷹に接近しようとし、古鷹はそれをわかっていたように背部のサブアームを巧みに扱いスラスターキャノンで高速で距離をとりながら銃剣から次々に牽制弾を射つ。

加古はそれをスウェイで避けたり十字槌でガードしながら上手く捌く。

単純な速度は加古の方が速いらしく、徐々に距離が縮まっていく。

加古「ハアツ！」

距離がある程度まで縮まると加古はスラスターの出力を最大にして、瞬間的に古鷹に接近する。

そしてスラスターの出力を落とさずに動き続けながら乱舞する。

右フック、左フック、右ボディブロー、左鉄槌、右ショートアッパー、左ストレート。

次々と息をつかせない速度で拳打を繰り出す。

古鷹はそれを避け、捌き、防ぎ、加古の攻撃に合わせて膝で加古の腕を蹴り上げ、スラスターキャノンを瞬間的に噴かして飛ぶように後ろへ跳躍した。加古はそれを追いかけてダッキングしていく。

古鷹「そこっ！」

古鷹はそれを予知したかのように着地と同時にスラスターキャノンの砲身を加古に向けた。

加古「うおっ!？」

加古は自分に砲身が向いた瞬間に強引に身体を動かし、転がるような動きで射線から離れる。

そしてキャノンが轟音と共に放たれてモウモウと土煙が立った。

吹雪「きやあ!!」

その余波は離れて見ていた吹雪のもとにまで届き、その威力がうかがい知れる。

土煙が薄くなると土煙をモロに被って汚れた加古とニコニコしてる古鷹がいた。

加古「古鷹あ、それ地面に向けるの反則じゃないの？見てよこの土

埃まみれの身体」

古鷹「先に禁止って言わなかったでしょ？」

加古からの避難に古鷹は冗談めかして答える。

吹雪「ゲホツ、い、今のがさつき言ってたスラスターキャノン……ですか？」

吹雪は咳き込みながら古鷹に質問する。

古鷹「あ、ごめんね。煙たかったよね。そう。今のがスラスターキャノン。見ての通り威力は高いけど、スラスターの出力を最大にして撃たなきゃいけないから少しタメが必要なんだ」

吹雪「だから距離を離したんですね」

古鷹「うん。そういうこと」

加古「まだ見ていくか？」

吹雪「いえ、次のところへ向かおうと思います」

加古「次って言おうと……第四訓練場か。あそこは今見ものだぞ？見たいなら早く行きな！」

吹雪「はい！ありがとうございます！」

吹雪は二人に向かってお辞儀をして、第四訓練場へ急いだ。

7話 鎮守府が誇る矛と盾

く第四訓練場く

吹雪が第四訓練場につくと訓練場の周囲に多くの艦娘と思わしき人達が集まっております、訓練場に向かって何やら応援や野次を飛ばしている。

吹雪は中を覗こうとしてピョンピョンと跳ねるが、身長的にあまり良く見えない。

意を決して人混みの中に入り、もみくちゃにされながらも何とか最前列にきた。

吹雪「す、凄く狭い……けど、なん……とか見え……る」

吹雪はあまりの窮屈さに圧殺されるんじゃないかと重いながらも訓練場の中心に目を向ける。

そこにはおそらく戦艦であろう長身の艦娘と、昨日お世話になり、部屋に案内してもらった扶桑が対峙していた。

二人はさつきまで吹雪が見てきた艦娘よりも、更におかしな装備をしていた。

扶桑は見たところ砲の類は一切装備しておらず、足の艤装は一見スマートだが良く見ると多数のスラスターと思われる噴出口がある。

しかし如何せん目を引くのが背中から伸びる6枚3対の大きな翼だ。畳んだ状態でも扶桑の膝下に届くような大きさだ。

翼はどう見ても鉄で出来てるが、まるで本物の翼のように羽の先が風に揺れてなびいている。

そして扶桑と対峙する艦娘は足、腰、背中に見た目からわかるほど出力の高そうなスラスターをつけており、左腕には少し大きい手甲をつけている。

しかし、それらの存在感が薄くなるほどおかしな物を持っている。異常な大きさの剣だ。目測でも長さ3メートルはあり、厚さも相当な物だ。剣腹も幅広く、40センチはあるように見える。重量は200キロ近いのではないだろうか。

それを軽々と担ぎ上げ扶桑と対峙している。

らずに今度は逆に扶桑を弾き飛ばした。

そして飛ばされた扶桑に追い討ちをかけるようにスラスタを利用して飛び上がって身体を大きく回しながら剣を扶桑に叩きつけた。

扶桑が叩きつけられたと同時に地面にヒビが入り、辺りに土埃が舞う。

宙にいた艦娘は更に追撃しようとして切っ先を叩きつけられた扶桑に向けてスラスタを全開にして突貫する。

しかしその瞬間土埃の中から扶桑が高速で後ろに飛び退いて回避するのが見えた。

良く見ると扶桑の翼はただの翼ではなく、翼事態が盾とスラスタの役割をはたしているようだ。

土埃を突っ切つて艦娘がまたしても扶桑に向かって突貫しだした。艦娘はスラスタを全開にして体重と剣の重量を全て乗せた突きを繰り出した。

戦艦艦娘の装甲でも余裕で貫通しそんな貫徹力をしているのが見てもわかる。

しかし扶桑は6枚全ての翼を使ってその突きを受け止めてしまった。

周囲に一回目とは比較にならない重音が響き、まるで大気が揺れているような錯覚すら覚える。

「これすらも受けるか。前よりも堅牢になったな」

扶桑「私も皆さんに置いていかれないように必死ですから」

「それは私も……同じことだ!!」

艦娘がそう叫ぶと同時に剣を瞬時に引き、野球のような動きで剣をフルスイングする。

扶桑はそれを翼で防いだにも関わらず宙にカチ上げられる。

扶桑「くっ……!」

「行くぞお!!」

扶桑をカチ上げた直後に艦娘は剣を左手で逆手に持ち変え、スラスタを噴かして空中の扶桑にアッパーのような動きで飛び上がって切りつけようとすする。

扶桑「甘いです！」

扶桑は宙に浮いたままスラスターを噴かしてであろうことか空中で横に移動して回避した。

「なに？！くそっ！」

扶桑が空中で動くと思わず直撃を確信していた艦娘の剣は空を切った。

艦娘は驚きで僅かに動きが鈍るが、外れた瞬間に身を捻ってスラスターで地面に瞬時に着地し、それと同時に扶桑も着地した。

「ふう……なるほど。いつの間になんな動きを身に付けたんだ？」

扶桑「最近ですよ？少しずつ練習しましたから」

「なら、私も新しい動きを見せてやらねばな」

そう言い剣を右手に持ち変えるとスラスターの出力を更に上げて高速で接近する。そして剣を左から右へと振り、“切り抜けた”。

扶桑「速い!？」

いままでであれば扶桑に防がればそこで止まってしまっていたが、今回は切り抜けてスラスターの出力を落とさずにスラスターの角度を巧みに操作してUターンしてきた。

「言っただろう。私も必死だとー！」

そして次々と繰り出される剣戟。

切り抜け、切り抜け、袈裟斬り、逆袈裟斬り、切り抜け、大上段から叩きつけ、撫切り、切り抜け。

扶桑は何とか防ぎとおすが縦横無尽に切りかかってくるため、その場から動けないでいる。

「これで……終わりだあ!!」

艦娘が切っ先を前に向けて両手で剣の柄を持ち全身全霊の一撃を放つ。

それは突きではなく、もはや大砲と呼ぶに相応しい威力と速度だった。

扶桑「私は……終わりません!!」

扶桑は迎え撃つように翼を開き、翼の先を艦娘にむける。

すると羽根の隙間に内臓されたスラスターが出力を上げ、銀の翼が

赤熱しだした。

吹雪は知らないがそれは扶桑がもつ唯一の攻撃手段であり、隙は大きく射程も短いがデメリットに相応しい火力を持っている。

「オオオオアアアアアアアア!!」

扶桑「はああああああああ!!」

二人の渾身の一撃が重なり、思わず目をつぶってしまうほどの衝撃と、耳の横で爆弾が爆発したかのような文字通り爆音が周囲の艦娘を襲う。

吹雪を含む一部の艦娘はその余波で転倒している者やあまりの音量にクラクラと目眩を起こす者もいた。

吹雪がゆっくりと目を開けると変わり果てた二人が爆心地に立っていた。

扶桑は制服のほとんどが衝撃で破けてしまい、左胸に剣が刺さり剣より左の翼が折れ曲がり、肉体はほとんど皮でぶら下がっている状態だった。

艦娘は扶桑の渾身の一撃を正面から受けたようで制服は上半身のものは消し飛び、下半身のものもボロボロになっていた。

その上右腕が根元からなくなっており、左腕もボロボロで焼け爛れたようになってる。

しかし、二人は笑っていた。

「ハ、ハハハハハハ……また、決着がつかなかったな……扶桑……」

扶桑「フフ、フフフ……。そうです……。ね……。また、ですね……」

吹雪は急いで二人のもとへ向かおうとしたが身体がフラつく。すると先に誰かが後ろから二人のもとへ駆けつけた。

吹雪「あれは！司令官!？」

誰よりも先に二人のもとへ向かったのは提督だった。

吹雪が呆然としてしていると提督が何やら二人に話をしているようだ。

「お前ら……またやったのか？やるのはいいが、後始末のことを考えて海上でやってくれると助かるんだがな？」

「そう、言わないでくれ、お前にそう言われたら……私は悲しくなってしまう……」

扶桑「それに……これだけ……負傷してしまつたら、海上では轟沈して……しまいます」

二人は途切れ途切れに言葉を紡ぐと冗談めかして提督にそう言う。「まあいい。すぐに入渠するぞ。おい！動ける奴等で手分けして担架持ってきて二人を風呂にぶち込んでこい！」

提督にそういわれて何人かの艦娘が担架持ってきて二人を運んでいった。

私はしばらく二人の立っていたところを眺めていた。